様式Ｆ-１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：34315
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2012
課題番号：23720094
研究課題名（和文）　明治大正期の欧米での日本人美術商の活動に関する調査
研究課題名（英文）A Research on Japanese art dealers in the Europe and the United States during the Meiji and Taisho Periods.
研究代表者
山本　真紗子　（YAMAMOTO MASAKO）
立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー
研究者番号：70570555

研究成果の概要（和文）：
本研究では、明治～大正期に活躍した京都の美術商・池田清助(初代、2 代)と、池田の社員であった稲田賀太郎の活動について調査をおこない、その実態を明らかにしている。両者の活動、とくに海外での活動を明らかにすることで、近代の日本美術が欧米に紹介される軌跡を明らかにし、またその過程についての理解を深めることができた。

研究成果の概要（英文）：
This study discusses the rise and fall of Japanese art dealer Seisuke Ikeda and Hogitaro Inada during the Meiji and Taisho periods. Detailed examination of their activities helps us understand how Japanese arts and crafts were introduced to and accepted in Europe and North America.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文科学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：美術商　近代　日本美術　池田清助　稲田賀太郎　在外日本美術

１．研究開始当初の背景

近代日本美術史研究では 90 年代以降、いわゆる制度論的議論が盛んにおこなわれてきた。「美術」概念を成り立たせている法令・ことばの概念・施設などの要素を研究対象としてとりあげ、西欧の art 概念の受容が近代国民国家形成による影響をうけながら、いかに進展してきたかを論じてきたのである。本研究ではそのなかでも比較的手薄である、美術の受容や美術愛好に関する論点として、「美術市場」に関する考察をおこなう。「博物館」と同様、「美術市場」も「美術」を「美術」たらしめる装置の一つであるといえるからである。特に美術商は、その装置において美術品を移動させる重要な役割を果たしている。

「美術商」は海外に日本美術を紹介する際、最初に現地の人々と接触する場・人物であった。日本美術の専門家として、海外の日本美術研究や愛好（コレクション形成等）に一定の影響力を及ぼす立場にいた。また、いわゆる学術研究（者）とは違い、政府の方針や社会・経済、現地の嗜好など様々な要因によりその活動が左右されるため、同時代の日本美術に対する意識がその活動に反映しやすいと思われる。こうした性質から、彼らの活動を丹念におっていくことが、当時の「日本美術」や「日本美術史」形成をとりまく状況を読みとくことにつながるのである。

２．研究の目的

本研究は京都の美術商池田清助家とそのコレクションに関する調査、また、池田の社員であった稲田賀太郎の活動について、海外に残された資料の発掘と、その調査を中心におこなった。

池田清助は明治期の美術商である。彼は外国人向けに美術工芸品を販売して財をなした。海外で活躍した日本人美術商、日本美術を海外に移動（輸出・流出）した美術商としてよくしられているのは、林忠正・松木文恭・小林文七や起立工商会社・山中商会といった面々であろう。広い意味では陶磁器の輸出をてがけた森村ブラザーズや、着物・刺繍製品を輸出していた髙島屋なども含めることができるかもしれない。先行研究としては、これらの商店・個人についての研究のほか、陶磁器など特定の品目の海外輸出について述べた研究、同時代史料から美術商の活動をあきらかにした研究がある。

これらの店・人々にくらべれば、本研究でとりあげる池田や稲田は、一般的にはほとんど知られていない。しかし、彼らの活動を調査していくと、活動の変遷が当時の日本美術をとりまく環境とのかかわりが深いことが明らかになり、また日本人美術商同士の関係や現地の日本人コレクターらとのネットワークをかいまみることができることがわかった。その歩みは、日本が海外に向けて美術工芸品の販売を奨励した軌跡に重なるのである。本研究は、同時代史料を用いつつ、稲田賀太郎の活動と、池田清助のコレクションがたどった道を明らかにする。そこから、当時の日本美術が海外に移動したルートや、そののちにたどった移動史について述べる。池田のコレクションのように、小中規模の日本美術コレクションが海外には少なからず残されている。それら多くのコレクションが、人々の身近に日本美術を感じさせ、“日本熱”の人気を下支えした可能性に注目したい。

３．研究の方法

本研究では、国内外にのこる文献資料を閲覧し、該当期の史料の掘り起しと調査を中心におこなった。国内では主に国会図書館をはじめとする資料所蔵機関での資料調査をおこない、また国外では、後述するように稲田賀太郎の著書の閲覧と池田清助コレクションの実見調査、および関連資料の閲覧調査をおこなった。

(1)平成 23 年度
①Bibliothèque nationale de France（フランス国立図書館）
・稲田賀太郎が関連した浮世絵展のカタログの閲覧
・19 世紀末のパリにおける日本美術商に関する資料の閲覧
②Musée des Arts décoratifs（フランス・装飾芸術博物館図書室）
・稲田賀太郎が関連した浮世絵展のカタログの閲覧
③National Art Library (英国・国立アート・ライブラリ)
・稲田賀太郎の著書・自筆稿の閲覧
・19 世紀の日本美術・日本美術研究所の閲覧
④British Museum（大英博物館）
・池田清助・稲田賀太郎より購入した作品記録の閲覧

(2)平成 24 年度
スタンフォード大学での調査
①Iris & B. Gerald Cantor Center for Visual Arts
・池田清助コレクションの閲覧
② Special Collections & University Archives（Green Library）
・ジェーン・スタンフォード関連資料の閲覧
③HOOVER INSTITUTION ARCHIVES
・ジェーン・スタンフォード関連資料の閲覧

４．研究成果

本研究では、主に池田清助の店員、稲田賀太郎の英仏での活動と、アメリカに残存する池田コレクションについての調査をおこなった。

池田清助や稲田賀太郎の活動を明らかにすることは、日本人美術商の海外での活動を明らかにする上で、先行研究が比較的手薄な部分を埋める作業となった。先行研究でとりあげられてきた起立工商会社や山中商会のような大規模な会社に比較して、池田はそれほど大きな企業ではなかったかもしれない。しかし、池田の活動は、明治時代の美術工芸品をとりまく環境を反映した事例であるといえる。また、こうした小規模な美術商の活動が、なかなか活動が明らかになっていないものが多く、そうした日本人美術商の活動を明らかにしたという意味でも重要であるだろう。

また、日本人美術商の活動時期という点でも、彼らの活動を追うことは重要である。日本美術をとりまく状況は 1900 年前後にはそれまでと若干変化が生じてきた。欧米では日本美術に対する関心は高まっている一方、日本人にも日本美術への関心や意識が芽生えてくる。フェノロサ、岡倉天心らによって日本美術史の確立が急がれ、また明治 33（1900）年パリ万博にあわせ *Histoire de l'art du Japon*（のち 大正 5・1916 年『稿本日本帝国美術

略史』出版）が作成されたように、次第に日本美術研究が進展していく。当代の日本美術の“輸出”が積極的にすすめられる一方、古美術の“流出”に危機感を覚えるようになり、古美術保護の政策が進められる。古社寺保存法が発効した明治 30 年代以降は、古美術品の蒐集は困難になったと考えられる。

そうした状況になって以降にあらわれた美術商として山中商会があげられる。山中商会は、日本美術のほかにも中国美術を扱う、また、欧米の有力美術コレクターや美術館・博物館、研究者らと商売上の関係を結ぶだけではなく、時には日本美術の展覧会や研究書の出版をおこない、日本美術や日本文化の普及やアピールをおこなった。起立工商会社のような半官営の企業ではなかったものの、当時の社会状況や政治の動向なども踏まえつつ、外交・文化戦略的な視点も持った活動を行っていたという側面がある。稲田や池田の活動は、山中商会にくらべれば、規模や活動時期において小さなものであったと思われるが、欧米での日本美術研究や日本文化紹介の一翼を担っているのだという意識は、明治人としてはそれほど珍しいものではなかったのではないか。とくに稲田は短期間とはいえ、実際に V&A や大英博物館で専門的知識の提供をおこない、執筆活動に熱心にとりくんでおり、当地での日本美術研究の進展に寄与したと言えよう。

池田清助とジェーン・スタンフォードの関係は、日本人美術商と富裕な欧米の日本美術のコレクターの関係の一事例としてどのような意味があるのであろうか。

19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカは、日本美術蒐集の流行のひとつのピークであった。1876 年のフィラデルフィア万博でアメリカに紹介された日本美術は、1893 年のシカゴ万博では美術陳列館に展示され、日本人職人の手によって建設された平等院鳳凰堂のレプリカのなかはいろいろな時代の美術品で埋め尽くされた。ボストン美術館では、フェノロサが 1891 年〜96 年のあいだキュレイター—として勤務、モースが 92 年から自身の陶磁器コレクションを譲渡し日本陶器部門のキーパーとなる等、東アジア美術研究の中心となっていた。ジェーン・スタンフォードの元に池田コレクションが到来した 1904 年は、くしくも岡倉天心がボストンに着任した年である。アメリカ合衆国に残る有名かつ素晴らしい日本美術コレクションがこのころ形成されていったのだ。

しかし、池田とジェーン・スタンフォードの関係は、こうした動きとは若干異なる部分がある。ひとつは池田があくまで日本を中心に活動していた美術商であるということだ。池田自身は再三海外への進出をこころみていたことや、海外輸出をおこなっていたとの記述はみられるものの、現在までアメリカに拠点をおき活動していたとの記録は見つけられていない。そうした意味では、アメリカに彼のコレクションが残存したのは偶然によるところが大きい。

また、ジェーン・スタンフォードも、いわゆる日本美術コレクターとは違う。彼女は自身の趣味や嗜好といった観点ではなく、大学での教育のためという目的で美術品を購入している。通常、コレクターは自身の興味・関心・趣味にあわせて品物を選定しコレクションをつくっていくが、ジェーンが池田コレクションを購入した事情を考え合わせると、ジェーン自身が購入品を選定した可能性は低いように思われる。むしろ、池田がコレクションとして選んできたものが、そのままジェーンに購入されといえるだろう。このことにより、スタンフォード大学にのこる池田コレクションは結果的に当時の日本美術コレクションの趣味を残しているのではないかと考えられる。

一方、スタンフォード大学の池田コレクションは、これまでなぜそれほど注目されてこなかったのか。サンフランシスコでは、購入からほどなく（1906 年 4 月 18 日）大地震がおこり、スタンフォード大学も大学美術館も甚大な被害をうけた。その後の復興にあたり、大学美術館のコンセプトの見直しなどもおこなわれたこと、この復興期が折悪しく日米開戦などを背景にアメリカに日本文化や日本人に忌避感が広がった時期であったことなどから、池田コレクションもそれほど注目されなくなってしまったのではないだろうか。購入後に池田コレクションのたどった道のりも、今後調査を重ねていきたいところである。

本調査では、池田清助家、および稲田賀太郎について、基礎的な事項の確認に終始したといえる。いまだに両者の経歴には不明な点が多く、残された課題が多いものとなってしまった。

稲田賀太郎については著書の内容の確認にとどまっているため、パリでの稲田の足跡を発掘するところからはじめていきたい。*Annuaire du commerce Didot-Bottin* など資料から、稲田のパリでの活動時期や店舗所在地を明らかにしていきたい。また、共著者や稲田が監修した展覧会の関係者である、Charles Vignier や M. Densmore（Marianne Densmore か）、Henri Vever らの側の資料と照合し、より分析を進めていく必要があるだろう。

池田コレクションに関しては、資料の実見が一部にとどまっているため、のこりの資料の実見をすすめる。他、ジェーン・スタンフォードが訪問したという東京支店の活動について明らかにする。現在、所在地

住所のみ明らかであるため、ジェーン来日前後の時期を中心に、商工名簿や新聞記事の探索などを行う。
　さらに、池田清助が海外進出前に拠点をおいた神戸での活動をあきらかにしなければならない。神戸での活動は、新聞記事や新聞広告等いくつか記録を発見しているが、時期もまばらで断片的なものにすぎない。また、神戸での商業活動から明治 14 年の海外進出時まで、池田の共同経営者であったと思われる浜田篤三郎の事績を明らかにすることで、池田合名会社の全貌が明らかになるのではないかと考えている。
　今後も国内外で現地に残る資料の調査をおこない、新資料の発掘とそれに基づいた研究を実施していきたいと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①著者名：山本真紗子、論文標題：「明治期から日米開戦前のアメリカの日本人美術商の活動」、雑誌名：LOTUS、査読：有、巻名：33 号、発行年：2013、ページ：18～34

〔学会発表〕（計 2 件）
①発表者名：山本真紗子、発表標題：「ビゲローらと日本の美術市場・美術商」、発表学会名:日本フェノロサ学会第 33 回年次大会、発表年月日：2012 年 9 月 12 日、発表場所：帝京大学霞が関キャンパス（東京都）
②発表者名:山本真紗子、発表標題: ”Seisuke Ikeda and his collection ”、発表学会名：国際日本学会（The International Association for Japan Studies・IAJS)、発表年月日：2012 年 11 月 24 日、発表場所：立命館大学衣笠キャンパス（京都府）

６．研究組織
(1)研究代表者
　山本　真紗子　（YAMAMOTO MASAKO）
　立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー
　研究者番号：70570555

(2)研究分担者
　なし　　（　　）
　研究者番号：

(3)連携研究者
　なし　　（　　）
　研究者番号：